

遠見 小江島
眺輝 碧海灣
踏破 山頂宝
観青 椈松登

登山

厚木市 荒井 一雄

玉垣こそ
あふぎみければ その昔
巫女に恋せし日々もありけれ
大山に登る
青(緑)の椈や松を親ながら
遠い登り、やつのこと
で宝玉の山頂を踏破した
まぶしく輝く碧の相模
湾を眺めれば、遠くには、
なんと小さく江の島が見
えるではないか・・・

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(34)

春眠不覚曉
処処聞啼鳥
夜來風雨声
花落知多少
(孟浩然「春曉」)

「春眠不覚曉を覚えず」……この時期にぴったりの漢詩です。ぼんやりと空を眺めながら、ふと口ずさんだ方もおられるでしょう。口語訳は七五調にしてみましたがいかがでしょうか。

四月に入り、うららかな日ざしが大地に降り注いでいます。ヒバリやメジロなどの小鳥の声は、いつしか子守歌となってウトウトと眠気を誘い出

します。四月は「卯月」とも呼ばれます。これは「卯の花」や「空木」が咲く月からとも、また稲の苗を植える月(植月)から名付けられたとも言われています。私たちは今、美しい春の息吹に包まれています。

光のどけき
春の日に
静心なく
花の散るらむ

「古今集」紀友則(日の光が穏やかな春の日に、どうして桜の花は落ち着くこともなく散るのだろう)いつまでも心安らかな日々が続いてほしいと願いながらも、冒頭の漢詩のように、春の嵐が花びらを連れ出します。季節は止まることなく、初夏

折り折りの記(68)

波多野 重雄

小屋掛けの日本舞踊や花吹雪

西行も病の身を春まで、と念願成就したほど、花と人とのかわりは深い。高尾山に桜が咲けば、ケープル広場に小屋掛けして、春昼、玉簾や蝦の油の品師らで賑う。花の色が日に染まるころ、踊娘さんの日本舞踊に観客は陶酔し拍手喝采。くれそむ高尾嵐の花吹雪は一幅の絵をかます。家路のケール客は、花の野外劇場に花の坩堝となる。

(高尾山健康登山親睦会々長)



「花まつり」の時には、花御堂に甘茶が注がれる

へと足早に向かっているのでしょう。季節の変わり目に行われるお寺の行事に「花祭り」があります。これは旧暦四月八日(今年の新暦では五月二十五日)のお釈迦様の誕生日をお祝いするお祭りです。高尾山薬王院においても、毎年四月八日には仏舍利塔において「花祭り」の法

会が営まれます。お釈迦様の誕生は、今から約二千五百年も前に遡ります。摩耶夫人という女性が昼寝をしていた時のこと。六つの牙を持つ白い象(白象)が胎内に入る夢を見ました。夢から覚めると、自然に身ごもっていることを知りました。四月八日に至り、摩耶

夫人は出産のための里帰りの途中で、ルンビニー(ネパールの南部)の園に立ち寄ります。そこで美しい花を手折ろうと枝に手を伸ばした時、夫人の右脇からお釈迦様は生まれました。するとすぐに立ち上がって七歩踏み出し、右手で高く天を指し、左手で深く地を指して、言葉を発しました。天上天下 唯我独尊

(この世界に私よりも尊いものはない)この時、天地は揺れ動き、妙なる音色とともに天から多くの神々が降りてきました。お釈迦様の頭上には香湯(良い香りの水)が注ぎ、小さなお身体は金色に照り輝いていました。

お釈迦様の「天上天下唯我独尊」という言葉は、この世の苦しみから、人々を普く済おうとする強い思いから言い放たれたものです。「四苦八苦」と

いう仏教語があるように、この世は、自分の思うようにならないこと(苦)で満ちあふれているのです。

ところで「四苦八苦」の「四苦」とは、「生・老・病・死」の四つを言いますが、なぜ始めに「生」(生まれること)が入っているのでしょうか。新たな命の誕生は喜ばしいはずなのに、何か不思議な気がします。

この「生苦」については、鎌倉時代の説話集に、次のように記されています。人は、母親のお腹の中で三百日、あるいは二百六十日も包まれているけれど、いざ生まれる時には、例えば生きた牛の皮を剥ぎ取って、棘の道を通るような苦しみがある。また柔らかな蒲団で受け取ったとしても、赤ちやんととってみれば百千の剣で切り開かれるような痛みがあるのだ。だから赤ちゃんの初声は「苦かな、苦かな」と聞こえるのだよ。

(『宝物集』)

他にも「生苦」については、生まれる時には冷たい風が身に触れて、それは地獄と同じような苦しみであるからとも言われます。

(頼瑜「秘蔵宝輪勘注」)こうした話を読みながら、自分はどうだったのかと考えますが、もちろん思い出すことなどできません。ただ、生まれたことよって喜びとともに苦しみも経験し、それを乗り越えることよって成長できたようにも思

います。人間はもちろん、全て命あるものは、様々な苦しみをくぐり抜けてきたと言えるのかもしれない。

生老病死苦 以漸悉令滅 (法華経) 観世音菩薩普門品 (生老病死の苦しみを、すっかり消滅させる) 季節の移り変わりを観じ、ただお経を一心に唱えます。

(栃木北部教区普濟寺中) 八王子市にお住まいの増山進・史子御夫妻より、新しく檜扇を御奉納頂き、御礼申し上げます。この檜扇は、御護摩供修行の際に修法する御導師が、護摩壇の護摩木に点火された浄火を益々と大きな炎にして、煩惱を焼きつくす為に使用されます。

御奉納御礼



現存最古の檜扇は、京都・東寺のものとされています。